

☆本日の教団聖書日課は、「見失った羊」と「無くした銀貨」の譬えで、主題は「個人に対する教会の働き」である。よく知られた譬話であるが、ルカ福音書の特徴は、無くしたものを見つけた所有者の大仰な喜びの姿（6,9 節）であり、何よりも天の神や天使たちの「大きな喜び」（7,10 節）である。「ひとりの魂」を求める神の大きな愛が強調されている。

☆もう一つ大事な点は、「99 匹を野原に残して」、「99 人の正しい人についてよりも大きな喜び」とあるように、彼らについての主イエスの冷たい態度である。この 99 人とは誰か、端的に言っていわゆる「ファリサイ派の人々」「律法学者たち」に他ならない。この点では、次の「放蕩息子の譬え」でより明らかに示される。放蕩息子が戻って大喜びし、宴会まで催す父親に対して、兄息子の方は冷たく反応する。彼は弟が悔い改めて戻ってきても喜ばず、父の想いにむしろ反発する。ファリサイ派の彼らは、己の正しさを追い求めることに汲々として、周りに対して愛の眼差しを向けることができない。エゼキエル書に「災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは」とあるのは、まさに彼らのことである。

☆さて、この譬えはだれに向けられているのか。私たち今日のキリスト教会に対してである。私たちは一人の洗礼者が出たら、もちろん喜び祝う。教会を求めて来る人を大歓迎する。ではその一人を探し求めている働きをしているだろうか。「探し回る」（4,8 節）という表現を、現代の教会はどう捉えているだろうか。「失われた羊」は現代社会にたくさんいる。私たちの教会は、社会に出て行って失われた羊を探し歩いているか。

☆私は奈良で開拓伝道を始めた矢先、奈良少年院の篤志面接委員の要請があり、積極的に社会に出ていくよい機会であると、応諾した。社会からドロップアウトした少年たちはまさに「失われた羊」と捉えて、彼らに聖書の話をし、ギターで「翼をください」を歌った。一人ひとりに向き合う中で、深く気づかされたことは、様々な事情で傷つき、非行を重ねた「悪たれ」の彼らだが、実はその心の奥底には純な核が確かにあるということ。失われた羊である彼らの中から、洗礼を申し出る者が出たことはまさに「天にある喜び」であった。

☆また私は開拓伝道を初めて 5 年後、好善社のワークキャンプに参加したこときっかけでハンセン病療養所と関わることとなった。社会から締め出された「失われた羊」の人々を慰め励まそうと出かけた私が、実は私自身が彼らを追いやった「99 匹」の 1 匹であった事実を突きつけられることとなる。入所者の方々の人を見る眼は鋭く、私の中の差別・偏見を見抜く。療養所にこそキリストはいまし、差別者である私はそこで「迷い出た羊」として主に再び見いだされ、神の限りのない憐れみを受ける者として自らを再発見するのである。

☆好善社は昨年 145 周年を迎え、その記念礼拝で好善社の原点は何かを振り返った。好善社は戦前・戦後を通じて様々な事業を営んだが、その原点はハンセンを病んだ一人の女性と出会ったこと、しっかり「一人と向き合う」ことにあった。それはとりもなおさず、「自らと向き合う」ことに他ならない。現在タイ国と関わり、青少年ワークキャンプに若者を連れて行くが、彼らがワークを通し、入所者と向き合う中で「自らを見出す」ことを願っている。

☆教会の礼拝でみ言葉に養われる私たちが、社会で働き、人と交わる生活の中でこそ、み言葉の恵みを真に味わい、自らを再発見できると、私は信じている。アーメン